農産ＦＡＸ情報　第１号

令和７年５月１５日
ゆとりみらい21推進協議会 指導部会 幕別町忠類地区

１　秋まき小麦

○止葉期の追肥

・平年の止葉期は５月２６日前後です。幼穂形成期は平年並で、５月15日以降の気温も高く推移する予報のため、止葉期は平年より早い可能性があります。生育状況・気象予報を確認し、止葉期の計画的な追肥を行いましょう。

表１　止葉期の追肥例

施肥量（窒素分）	施肥時期	肥料の施用量
4kg/10a	５月下旬	硫　安（N21%）約20kg/10a 尿　素（N46%）約9kg/10a 硝カル（N14%）約30kg/10a

○植物成長調整剤

・茎数が多いほ場が散見されます。茎数が多いほ場は、登熟期の風雨で倒伏するおそれがあるため植物成長調整剤の散布を検討してください。

表２　植物成長調整剤の使用例

商品名	使用時期	使用方法	注意事項
エスレル１０	止葉期	200～333ml	低薬量では効果が劣る。
	出穂始期	100～200ml	穂が出始めた日から20%が出穂するまでに散布する。**30%以上出穂以降での散布は効果が劣る。**

○赤さび病の防除

・本病は５～６月の高温多照により多発しやすくなります。昨年発生が散見されたため、本年も発生する可能性があります。気象経過に注意し、防除を行いましょう。

・止葉が出る頃から穂ばらみ期の薬剤散布により予防できます。

表３　赤さび病の防除例

対象病害	系統名	薬剤名	希釈倍率	使用回数
赤さび病 （うどんこ病）	QoI	アミスター20フロアブル	2000倍	３回
	SDHI	イントレックスフロアブル	2000倍	３回
	SDHI	ミリオネアフロアブル	4000倍	２回

○縞萎縮病の感染拡大防止

・秋まき小麦縞萎縮病は、土壌の移動により未発生ほ場に拡大します。発生拡大防止のため以下のような対策を行ってください。

・未発生ほ場での作業を優先し、発生ほ場での作業はなるべく最後にする。 ・作業終了後は作業機械を洗浄する。 ・小麦の連作は可能な限り避け、輪作を徹底する。

２　豆類

○種子消毒

・種子消毒を実施し、種子伝染性の病害や害虫の発生を防ぎましょう

・タネバエは、湿気の多い畑で多発し、有機質肥料や緑肥、作物残渣などをは種前にすき込むと被害が多くなる傾向にあります。

表４　種子消毒の薬剤例

薬剤名	使用量（種子1kg当たり）	小豆				大豆							菜豆			
		茎疫病	褐斑細菌病	タネバエ	アブラムシ類	茎疫病	紫斑病	斑点細菌病	苗立枯病	タネバエ	アブラムシ類	ハト	茎疫病	褐斑細菌病	タネバエ	アブラムシ類
粉衣用ペアーカスミンD	0.3%（3g/kg）		○					○	○	○				○		
クルーザーMAX	8ml/kg	○		○	○	○	○		○	○	○	○	○		○	○

◎天候が悪くても焦らず！しっかり安全確認！

◎農薬使用後は生産履歴を忘れず記録しましょう！

◎風による他作物へのドリフトに注意しましょう！